



深山観音堂

■ 深山の由来

「深山(みやま)」地区は、白鷹町の北部に位置し、最上川支流の実淵川と黒沢川の合流する山間部に拓かれた。地名の由来は明らかではないが、一五八五(天正十三)年の深山観音文書に「みやま」と記されているのが最初とされる。江戸期に入り、荒砥代官所の文書には、「三山(みやま)」と表示されている。「三山」とは、集落北側に祭られる「深山観音堂」の裏手にある「権現森」、東側の「大頭森」、南側の鮎貝との境にある「中禪寺森」と称する「三つ」の森を「山」に例え、仏が宿る村と定めて「三山」と命名した云われがある。

また、昔は森を隔てた険しい奥地の村で、孤立したようなこの山里は、外部からの侵略を警戒した当時の村人により、危険な「深い山」を暗示させる「深山」の文字を充てたと推測されている。

八〇六(大同年間)年ころには、尾張に宗家を持ち、代々「徳業明神」を氏神とする羽田藤左エ門一族が定住していた。そこへ越後の長岡から長岡五兵衛という一族が移住する。さらに室町期、奥州平泉の藤原秀衡の命を受けて、下長井の領主に配属された藤原安親が、平安期の阿弥陀堂様式を伝える「深山観音堂」を建立した。後に近江などから、横沢、今、樋口、青木といった姓を名乗る氏族が開拓民として移り住み、集落を築いたと伝わる。

さらに当地は、会津仏教と神仏習合の羽黒修験との交流する交通の要路に当り、早くから小文化圏を形成していたものと思われ、近世に入り観音堂は三山詣の籠り堂として栄えたようである。

また、豊かな湧き水に恵まれたこの地では、農業の傍ら「深山和紙」で知られる楮を原料とする手漉き和紙の生産が行なわれた。一六二四(寛永元年)には、「上り紙」と称されて江戸に出荷された。大正から昭和初期にかけ最盛期を迎えるが、昭和三十年代に洋紙の急速な普及などに伴い手漉和紙は激減してしまう。だが、その後も和紙漉き技術は受け継がれている。

数々の伝統が残るこの地は、時空を超えて歴史がよみがえる郷である。





深山

活き生き 行きたくなる郷

宝策ア
お散アツ

深山観音(観音寺観音堂)

国指定重要文化財として有名な深山観音堂です。深山観音堂は、置戸三十三観音中第十八番目の札所でもあります。元來この堂は、阿彌陀堂として建てられたものですが、本尊の手手観音をここに安置してから、観音堂と呼ばれるようになったとのこと。



いきいき深山郷「のどか村」

山菜料理や手打ちそばなど素朴な田舎料理に豊かな人情を加え、訪れる方々をもてなしてくれます。また、そば打ち・木工・竹細工・わら細工・農作業・自然散策体験等、深山の魅力を感じることが出来ます。なぜか静かしく、そこはかたないのどかな時間の中で、地元の方々とのふれあいの時が楽しめます。



深山和紙センター

楮の木地が生かされた肌合い。受け継がれてきた手の温もり。深山和紙は楮を原料とする手漉き和紙です。その起源は約四百年前、上杉藩の御用紙として郡でも用いられ、長く厳しい冬の家の工業製品としてこの地で代々受け継がれてきました。その品質は「化粧を知らない村娘のように素朴であたたかい」という真珠仁まかべじんの言葉に象徴されています。現在では卒業証書や短冊、便箋などに用いられています。和紙漉き体験も可能です。(要予約)



深山工房 ち団子

工房の名前は、「自然に囲まれた深山の地で、土団子のぬくもりのような素材で独特な味わい」という願いに由来しています。地元の赤土などを用いてつくられる陶器は、どこかつかたく、それぞれで一個一個がしっかりと自分の「顔」をもっています。



「やまがたの棚田20選」

☎ 〇三三八(八五)〇三八〇

☎ 〇三三八(八五)三三四六

☎ 〇三三八(八五)一八〇七